

文献紹介

西村幸夫 著

『県都物語 47都道府県の近代を歩く』

有斐閣 2018年3月 352頁 3,600円+税

本書は、都市計画研究の第一人者である著者が、全国47都道府県庁所在地を何年もかけて丹念に訪ね回り、専門的知見からまちの成り立ちや景観を読み解いたものである。「あらゆる都市には物語がある」ということを念頭に、それぞれの都市の魅力を探っている。

書名の中の「県都」という表現は、都や府、道もあるが、ここでは都道府県庁が所在する都市をひとくくりに呼ぶものとして使用されている。各章には、各「県都」の特徴を一言で言い表わすサブテーマが付されている。また、どのページも、豊富な地形図を含む図版と写真が組み合わされ、ビジュアルな構成となっている。やや長くなるが、本書の目次を示すと次の通りである。

序論—県都都心の物語をあるきながら考える

- 1 札幌—植民都市のつくり方
- 2 青森—拡張と反転のバランス都市
- 3 盛岡—都市発展を軸線に読み取る
- 4 仙台—有芯のグリッド都市が導く時代
- 5 秋田—入れ子のコントラスト都市
- 6 山形—三島通庸が見た近代都市の姿
- 7 福島—骨格を徐々に付加する自然体都市
- 8 水戸—台地をめぐる分節都市
- 9 宇都宮—二つの都市軸を持つコンパクト都市
- 10 前橋—生糸商人の心意気都市
- 11 浦和—一線から面への転換都市
- 12 千葉—鉄道が導く成長の連鎖都市
- 13 東京—首都の顔をつくる鉄道網
- 14 横浜—不動の都市軸都市
- 15 新潟—閉じられた水網都市をひらく
- 16 富山—南正面から北正面への転換都市
- 17 金沢—巨大城下町の変容
- 18 福井—堀端通りを選ばない近代化
- 19 甲府—オモテとウラの反転都市
- 20 長野—境内から始まる漸進拡大都市
- 21 岐阜—関ヶ原合戦の遺産都市

- 22 静岡—生きている辻の札
 - 23 名古屋—うつろいゆく都心
 - 24 津—地域を枠づける橋
 - 25 大津—重層する難読都市
 - 26 京都—グリッドの慣性都市
 - 27 大阪—秀吉の構想を生き続ける都市
 - 28 神戸—東遷するモザイク都市
 - 29 奈良—三条通りが導く公園都市
 - 30 和歌山—離れた駅を結ぶ大構想
 - 31 鳥取—層状都市を貫くモダン橋
 - 32 松江—水の変奏都市
 - 33 岡山—柳川ロータリーへ注がれた想い
 - 34 広島—遺制と変革を生きる再生都市
 - 35 山口—中世をたどる年縞都市
 - 36 徳島—大きなビーズ玉の集合都市
 - 37 高松—海に開いた城下町
 - 38 松山—山を囲む環状都市
 - 39 高知—近世と近代の二層計画都市
 - 40 福岡—縁辺で結ばれる複眼都市
 - 41 佐賀—平野に浮かぶ水網都市
 - 42 長崎—岬の尖端から始まる年輪都市
 - 43 熊本—もう一つの戦災復興
 - 44 大分—実現した戦災復興計画の夢
 - 45 宮崎—徐々に生まれた近代都市
 - 46 鹿児島—南進する多軸都市
 - 47 那覇—転換を繰り返すメタモルフォーシス都市
- あとがき
参考文献

都市計画系の本は、一般の人々にとって難解であったり、親しみにくかったりするものが少なくないように思われるが、本書は、書名に「物語」とあるように、各都市の成り立ちや特徴を、まるで物語を読むかのように、とても分かりやすくひも解いている。また、著者の幅広い学識により、さまざまな視点から各「県都」を眺めることができる。

読むにあたっては、冒頭の「序論」をまず読むことをお勧めしたい。「序論」では、20ページにわたり、本書を執筆するにあたっての視点や方法、読み方などが示されている。この「序論」を踏ま

えた上で、「あとがき」に著者自身が述べているように、どの章から読み始めても良い。

著者も述べているところであるが、「県都は必ずしも有力観光都市というわけでもない」ため、観光目線ではない、生活目線でのまちの物語を描こうとしている。また本書が、「県都」という限られた都市を取り上げたのは、「県庁舎がどのような場所に、どのような意図で建てられたかを見ることによって、明治の近代国家の統治のスタイルを目に見える形で語るができると考えたからである」と、その理由を述べている。

近年は、テレビ番組の「プラタモリ」を代表とするように、まち歩きへの関心や人気が高まっている。そうした観点からも、本書は時宜を得たものと言えよう。著者自身も、本書を読むことによって各自が「自分の住むまちを旅する」ことを期待している。そうした意味では、本書は「プラタモリ」の書籍版と言ってもよいかもしいない。

本書で著者は、都市の骨格となる部分を比喩的表現として「骨相」と呼んでいるが、これをよく見つめることで、都市の個性を新しい角度からあぶり出せるのではないかと考えている。さらに、まちあるきをする中では、当たり前に見えるものに、「なぜ?」という疑問を抱くことが重要であるとしている。その疑問を解明するためには、さまざまな資料に当たる必要がある。

実際、本書を執筆するにあたり著者は、現地調査はもとより、巻末に見られるように各地から膨大な文献を収集し、分析を行っている。本文においても、地図や地名にほかに、各地の『市史』や郷土史などの歴史書をひも解くことや、地元「博物館」の歴史展示や展示図録も参考になることが紹介されている。

評者は、博物館で人文地理分野を担当する学芸員として、20年にわたる勤務経験がある。その経験をもとに述べるならば、博物館の展示室には、その地域の地形模型や街並み模型、特色ある民俗資料や絵図をはじめとする歴史的資料などが展示されていて、その地の風土や歴史を手っ取り早く知ることが出来る。また、手続きは必要であるが、請求すれば、収蔵庫に保管されている地元の絵図や地形図・古写真・古い絵葉書などの閲覧も可能である。さらにミュージアムショップには、常設展示や特別展示の図録をはじめ、紀要・郷土

史本・古地図なども販売されているので、それらの利用もお勧めしたい。

もう一つ、各自治体からは、膨大な『県史』や『市史』が刊行されている。筆者は、人文地理学の立場で、これまでにいくつかの自治体で、近世編や近現代編の市史編さんに関わってきた。そうした自治体史は、公立図書館の郷土資料コーナーなどで閲覧できるが、市役所や博物館などで購入することも可能である。かつては、政治史や経済史に関心が置かれたものも多かったが、近年は、地理学を専門とする執筆陣が参画し、図説編や図録編・地図編を刊行したり、地理編を刊行したりするケースも増えてきており、地理学研究に役立つものも少なくない。

ところで、先に触れた「骨相」という比喩的表現は、都市のもとなる骨格の特徴(地形や都市構造)を見ようとする中で、「なぜこの都市はほかならぬこの場所に立地しているのか」という背景を考えるものとしている。つまり「骨相」を明らかにすることは、都市の立地論に通ずるものであるということができる。また、都市の立地は、個々に見ていくと、決して一般論的な説明のみで片付けられるものではなく、多様性を見出すことができる。著者は、「そこにこそ、都市の物語としてのおもしろさがあるのではないかと述べている。

本書で紹介されている各「県都」は、城下町と宿場町における発達の違い、県庁をなぜその位置に定めたのか、鉄道駅をなぜその場所に設置したのかなど、さまざまな観点から比較検討することができる。

一例として、道路に軸を置いて眺めてみると、一見同じように見える都市の大通りも、戦前期は大火後の延焼防止のための整備に基づくものが多いが、戦中期は疎開空地を利用した防空上のものとなり、戦後は戦災復興事業による都市計画によるものとなるなど、その事情は都市によって異なることがわかる。

また、現地に残る具体的な手がかりから都市の物語を考える方法も紹介されている。1873(明治6)年に県庁所在地に樹立された里程元標(1919年から道路元標)は、実は官側の視点から設置されたものと、民側の視点で設置されたものがあるという。前者は県庁前に置かれ、後者は人通りの

多い繁華街（静岡・高松・東京では伊勢丹や三越の前）に置かれている事実があるという。

本書は、各「県都」を紹介する地誌書・歴史書であると同時に、フィールドワークの方法論が学

べ、かつ今後の都市（史）研究のためのガイドブックとしての内容を兼ね備えた好著であると言える。

（浜田弘明）